

BOOKS

岡本玲子(編著)

対応困難な事例に学ぶケアマネジメント

質評価の視点とともに

鳩野洋子

国立保健医療科学院公衆衛生看護部

「つぼ」に定めるケアマネジメント考

評者が所属する公衆衛生看護部では、ここ数年、保健活動あるいは保健師活動の評価をテーマとして活動を行っている。その大きな理由のひとつが、「保健師さんは何をやっているかわからない」という世間の声に答えたかったから、もっと正直に言う「〇〇をやってます」と主張したかったからである。

主張するためには、誰がみてもそうだ、と納得できる明確な根拠を示すが必要になるが、そのためのツールが「評価指標」だろう。評価指標という「ものさし」で自分たちの活動を測り、提示することではじめてものがいえることになる。またそれ以前に評価することによって自分の活動の振り返りが可能になるのである。

そんな考えで昔に出ている評価指標を調べ、使えそうなものを蓄積する活動をここ数年実施しているが、これがなかなか難しい。難しいのは調べることでなく、保健師としての「つぼ」にはまる評価指標自体がないからである。



●A4版 124 ページ
定価：本体 2,000 円＋税
医学書院 (Tel.03-3817-5657)

この「対応困難な事例に学ぶケアマネジメント」では、編者が開発したケアマネジメントの評価を行うためのツールが紹介されている。その視点は介護保険支援専門員が行うケアマネジメントに焦点をあてたものではなく、より広義の意味のものであり、保健師が大切にしたい部分、つまり「つぼ」に込めようものとなっている。たとえば指標の項目のうち「個別ケアの基盤となる体制面の評価をする」「個別ニーズを集約し地域の問題を明確にする」などがそれにあたる項目である。

本書は2部構成になっている。第1部の「利用者中心のケアマネジメント

とは」では、ケアマネジメントの基本的な考え方をおさえるとともに、ケアマネジメントの構造、過程、結果の各々の段階における評価のツールが提示される。第2部は具体的な事例編であるが、第1部と連動し、対応が難しいさまざまな事例にかかわるうえで大切なポイントについて、第1部で示されたツールの項目と照らしつつ、具体的に解説がなされている。

保健師はたとえばケアマネジメントの過程評価票を用いて、自分のケアマネジメントの質をチェックすることができる。また、構造評価票をケアチーム会議の場に提示することで、チーム員のケア体制に対する認識を共有するための素材として活用できるだろう。事例編は現任訓練にも使えると思う。

このツールはいまも標準化のための検討が続けられているようである。このような日本の実践現場のなかから生まれたツールが今後も発展してゆくことを望みたい。